

はじめに

まず、教育長の年頭の辞（挨拶）を紹介します。

私たち教育に携わる者は、いわば、幸福を作る仕事をしています。すなわち「子供たちを幸せにする」、「県民の皆さんを幸せにする」仕事をしているのです。子供たちのために、県民の皆さんのために働いているのです。したがって、教育委員会のために、皆実高校のために働いているわけではありません。だからといって、個人で好きなように仕事をするわけではありません。「組織で」、「チームで」仕事をしなければなりません。

私たちは、絶えず、「自分は何のために仕事をしているのか？」「誰のために仕事をしているのか？」を自問自答し、それぞれの役割において創造性を発揮しながら組織の一員として、仲間と力を合わせながらチームとして、子供たちのために、県民の皆さんのために良い仕事をしましょう。

そのためには、しっかりと勉強しましょう。しっかりと本を読んで、いろいろな人の話を聞いて、みんなで議論をしましょう。「学びの変革」は、主体的な学習者を育成することを目指しています。私たちが率先して主体的な学習者でなければなりません。自ら課題を発見して自律的に行動し失敗を恐れず果敢に挑戦し続け、課題を解決していかなければならないと思います。

生涯にわたって学び続ける生徒を育成するために、生徒にまず何を身に付けてもらいたいのか、そのために私たちは何をなすべきか、校内で試行錯誤しながら実態に則した議論の中に皆実らしさが生まれつつある。「私たちが授業の質を上げ、常に思考をさせることこそが、生徒の学ぶ意欲を醸成させる。」という当たり前のことが、私たちが本来持っている授業にかける心意気をさらに前面に押し出してくれたと感じている。

指導と評価の在り方を授業と評価問題の一体化と捉え、授業ごとに目標・内容・方法の3つの柱を明確に意識して前に進めていくこと、すなわち「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を丁寧に深く整理する必要がある。これらを意識した、我々が発するICEを見極めた「問いの質」こそが今問われている。

教科の中で先輩が後輩を鍛えるという根本原理が浸透することを願いながら、教科主任会や教科会での議論の熟成が図られるようになることを大いに期待している。その時、歩は大きくはないが着実に確実に前進していることを一人一人が実感できるようになり、「学びの変革」の全県展開に向けて推進力は増してくるはずである。

私たちは専門の教科を持ち、それを頼みとして生きている。生徒に直接的・間接的にかかわる授業こそが私たちの主戦場であり、その場で生徒諸君に最も輝いてもらいたいと心から願っている。その面でも「Team MINAMI が全国レベル」の本領を発揮してほしいと思わずにはいられない。

平成 30 年 3 月

校 長 隠澤 浩雄